

結縁の日めくり

その六

……たとえ兄弟がすべての人を改宗させたとしても、あるいは私が病気を癒し、あらゆる種類の奇跡を行う賜物を所有しているとしても……私は宣言します。それさえも本当の喜びではない。

しかしある凍てつく夜、ペルージャから帰って来たとする。つららが私の上着の裾からさがり、向こうずねを打つので、血が出ているでしょう。寒さに凍えて、汚れた様子で、戸口に着く。だれか兄弟が出てくるまで叩き続ける。そして「兄弟フランシスコです」と告げると、彼は私を中には入れないで「馬鹿者！出ていけ！お前などいらない」と追い払う。たとえ私が何度頼んだとしても、一夜の宿さえも与えてもらえない……兄弟レオよ、もし私が、それを最後までずっと忍耐することができたなら、それこそが真の喜びなのだ……

——『聖フランシスコの祈り』 ウルフギヤング・ベイダー編／大島澄江 訳

賛美の力とは

イタリアはローマの北に位置するウンブリア地方のアッシジという町に、裕福な織物商の子として生まれたフランシスコ(1181～1226)は、若い頃、放蕩三昧の日々を経験しています。青年時代の夢は騎士になり、やがては貴族に列せらるることでした。アッシジとペルージャとの戦争に参戦し、捕虜となり、療養の時を過ごしています。それにも懲りず、イタリア半島南部の、ローマ教皇と神聖ローマ皇帝との戦争に教皇軍として参加しました。プーリアへ赴く道すがら、不思議な声に誘われて、故郷へ帰還します。古い教会で祈っているとき、「私の家を建て直せ」というキリストの声を聴く。その宗教的回心を経て、それまでの裕福な生活を棄て、無一物になり、神と人々に奉仕する生活に入りました。この清貧こそ‘わが花嫁’と自覚していた、中世イタリアの最も誉れ高い聖人（アッシジの熾天使と呼ばれた）が、小鳥や魚へ説教したエピソードや、1224年9月アルヴェルナ山で両手足とわき腹に‘聖痕’[*1]を受けたことは、人口に膾炙していますから、よくご存知のはずでしょう。

秘書であった兄弟レオに書き取らせたこの一文は、普通のひとには、まことに理解しがたい行為にうつるかもしれません。しかしそれゆえにこそ、まさに述べ伝えなければならないことなのです。聖フランシスコ自身に向けられた悪口雑言に喜びを感じる姿勢は、パウロが自分の苦しみを別の方向から観る眼差しに似ています。「それがすべてキリストのためであることを知っているので、私はこのとげを全く喜んでい。そして侮辱も、苦難も、迫害も、困難をも喜んでい。なぜなら、私は弱い時にこそ強く、少ししか持たない時ほど、ますます多く神により頼むからである」(Ⅱコリント 12.10 リビング・バイブル) と言っています。ここには、真の祈りがあります。現実の時間からの飛躍が読み取れます。逆境のなかにこそ感謝と不可分な賛美が湧き上がるのです。ここでは、難事は良いことなの

です。どんなことでも、すべては、神から来たものと見做すことができる謙虚さがあります。

私たちは、困難に見舞われると、自分の不平のなかでやきもきして、なぜ神は黙って見ておられるのか、となんと倨傲と不満に満ちみちていることでしょう。心のなかでは癒しを求めながらも、神が自分をこんなにみじめにされたと思っているのです。神への反抗としての生を、人間は苦しんでいます。さまざまな試練のなかで味わってきている罪と懐疑に囚われ、もはや祈ることさえできないとき、極限の孤独と死を意識しだすのです。転換は、神の腕に身を投げ出すことによって起こるのでしょうか。今日という日が与えられており、今日生きている私たちがどんな形であれ存在しているということが、神の慈愛に満ちた計画の一部であることに気づくべきなのです。弱い人間のあらわな存在があるところでしか、神とふたたびまみえることができません。なにが起ころうとも、どのような惨めさがもたらされようとかまうことはありません。すべての出来事に感謝し、全幅の信頼をおくことで、被造物が創造主と合体することになるのです。

すべてに対して、“有り難う”と言える精神は、否に然りを、闇に光をもたらすようです。難のないところに有り難さはありません。より深くへりくだることで、より高く昇ることができるのではないのでしょうか。逆境を賛美しようとする力と意思は、“ありがとう”のなかに、永遠に生きつづけているのかもしれません。

—————06/04/30 パウワウおじさん

[註1] 聖痕 (stigma)。キリストが受難の際に受けた傷（手、足、胸、額、肩などの）が、外的原因なしに身体に自然発生する現象。その傷の跡は感覚的、精神的な苦しみが絶えずともなうため、十字架につけられたキリスト（ユダヤ人には、木にくくられて死ぬ人は、神に呪われているという宗教的合意があった由）と同じ苦しみを味わうと云われている。